

卷 頭 言 —— 木簡史の研究について ——

昭和三十六年に平城宮跡で木簡が初めて発見され、やがて同四十一年に藤原宮跡で木簡が出土したあたりまでは、木簡というものの存在に驚きの目が向けられ、その史料としての効用に強い関心が寄せられて、木簡の形状や記述内容、作成過程や用途などについての研究がまず精力的に進められた、というのが当時の実情であった。その後しだいに全国各地の遺跡から数多くの出土例が見られるようになると、それらを見渡して、八世紀を中心とする古代の一定の時期に、木簡がどういふところまでの程度ふつうに用いられていたかという一般的な使用状況を考察することが可能となり、その結果、当時木簡は主として官衙およびそれに准ずる場所で、紙と並んでごく普通に広く用いられていたということが明らかになっていったといつてよいであらう。

そのころから私が一ばん気になっていたことは、日本の木簡には形状と寸法についての規格というものがなかった、しかもそれがまるっきりといつてよいほどなかったようだった。もちろん木簡は貴重な紙に対する補助手段として、より重要性の少ない事柄についての文書・記録・メモなどを作成する場合に用いられたものであるから、ふつうは規格などない、簡便に作ることでできるものであるのがむしろ当然であるかもしれない。しかしそれでも、その中に一部規格に嵌ったもの、あるいはその残存形態とでもいふべきものがあってもよさそうなのであるが、どうもそういうものは、まるっきりなかったようだということ、これは今日では殆んど疑問の余地もないし、またとくに問題もないことのように思われているようであつて、そのこと自体に対しては私も異論があるわけではない。しかし同時に私には、それが何か日本の木簡の歴史の特質につながっているところがあるような気がしてならないのである。

ただしそうはいっても、今日に至るまで私がそのような面について、何かひとの気がつかない事実気がついたとか、重要な所見を持つに至ったとかいうようなことがとくにあるわけではない。大たいはみな研究者の皆さんが仰っしゃることを、いろいろと感心して拝聴するにとどまっているのであるが、ただ木簡の使用状況は何といっても紙の使用状況によって根本的に規定されているわけであるから、やはりそのような問題は、主として紙の使用状況との密接な関連の下に考察されるべきだということだけは、恐らく間違いないことであろう。まえに岸俊男会長が冊書の有無の検討を手掛りとして、同一の場所における木と紙の使用状況の關係について、きわめて詳細な考察を試みられたのは、そのことを立証する一つの好例であるが、また、たとえば中国では簡牘の時代から紙の時代へという明確な変遷があったのに対して、日本では木簡だけの時代というようなものがあつたのかどうか、もしあつたとすれば、それはどのくらい長く続き、いつ頃までそうだったのかというようなことを問題とする場合にも、当然のこととして、紙の使用開始の状況と関連させた考察が絶対に必要となる。規格がまるっきりないということは、木簡だけの時代というものがかつて殆んど存在しなかったことを物語るように思われるのであるが、同時にまた図書寮の造紙關係の伴部や品部の在り方から推測すると、紙の組織的な製造の歴史はかなり新しいものであるから、もしそうであるとなると、木簡それ自体の歴史もそう古くみるわけにはいかないのではないかということにもなってくるのである。

このような使用開始の時期の問題のほかにも、木と紙との使用区分の問題とか、使用区分の変化に対応した木簡自体の容量や用途の変遷の問題とか、木簡衰滅の問題とか、いろいろな問題があるわけであるが、それらもみなやはり紙の使用状況と関連させて考察する必要のあるものばかりである。いずれにしても、年代的にも地域的にも広い範囲に亘って多くの種類の木簡の出土例がみられるようになった今日においては、これまでのような個々の木簡の綿密な検討を基礎とした個別研究と並んで、木簡使用の歴史を紙の使用の歴史との関連の下に総合的に考察する研究が、より積極的に進められてもよいのではないかと考えられるのである。